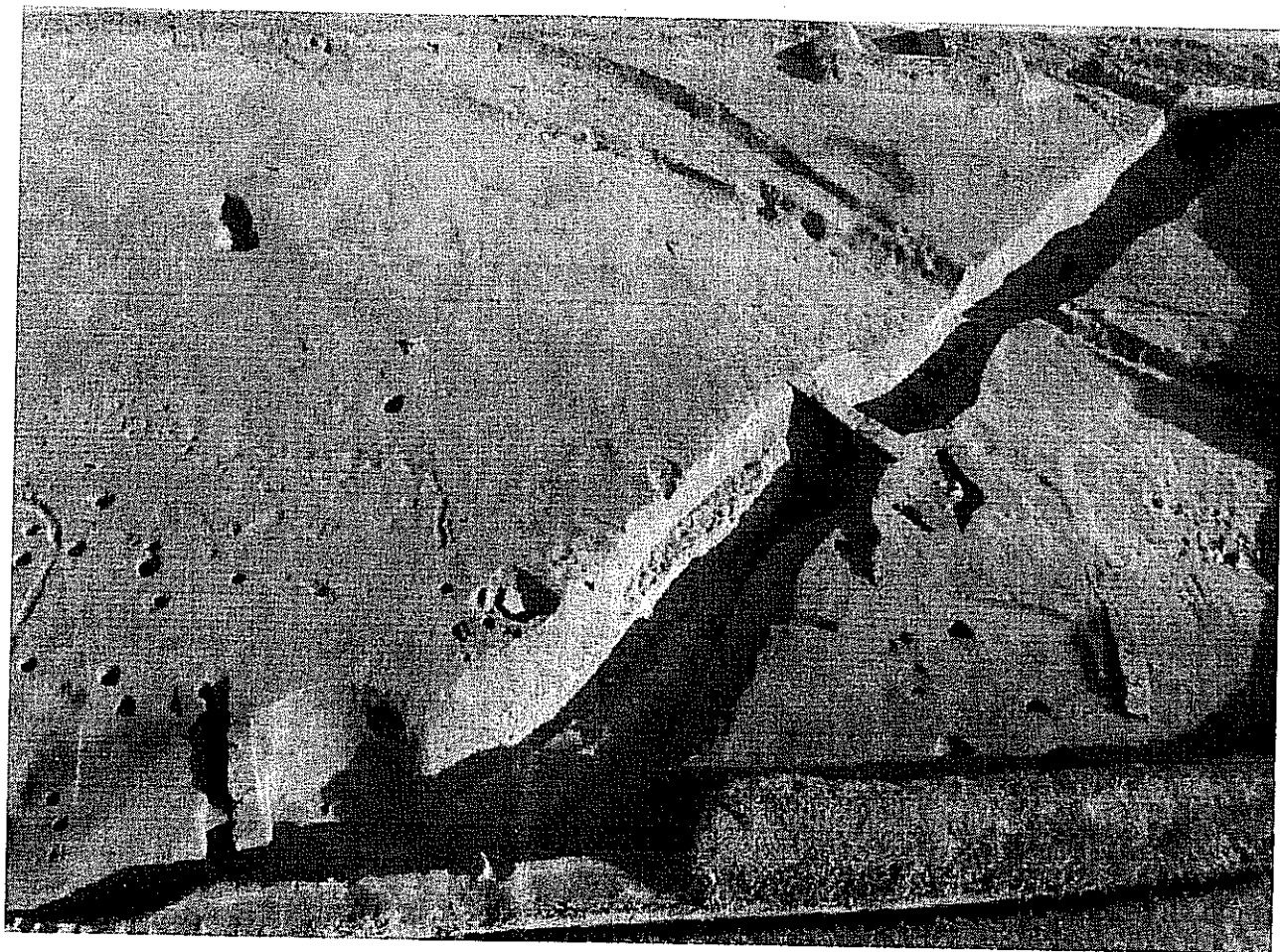


溝口4号遺跡発掘調査見学会

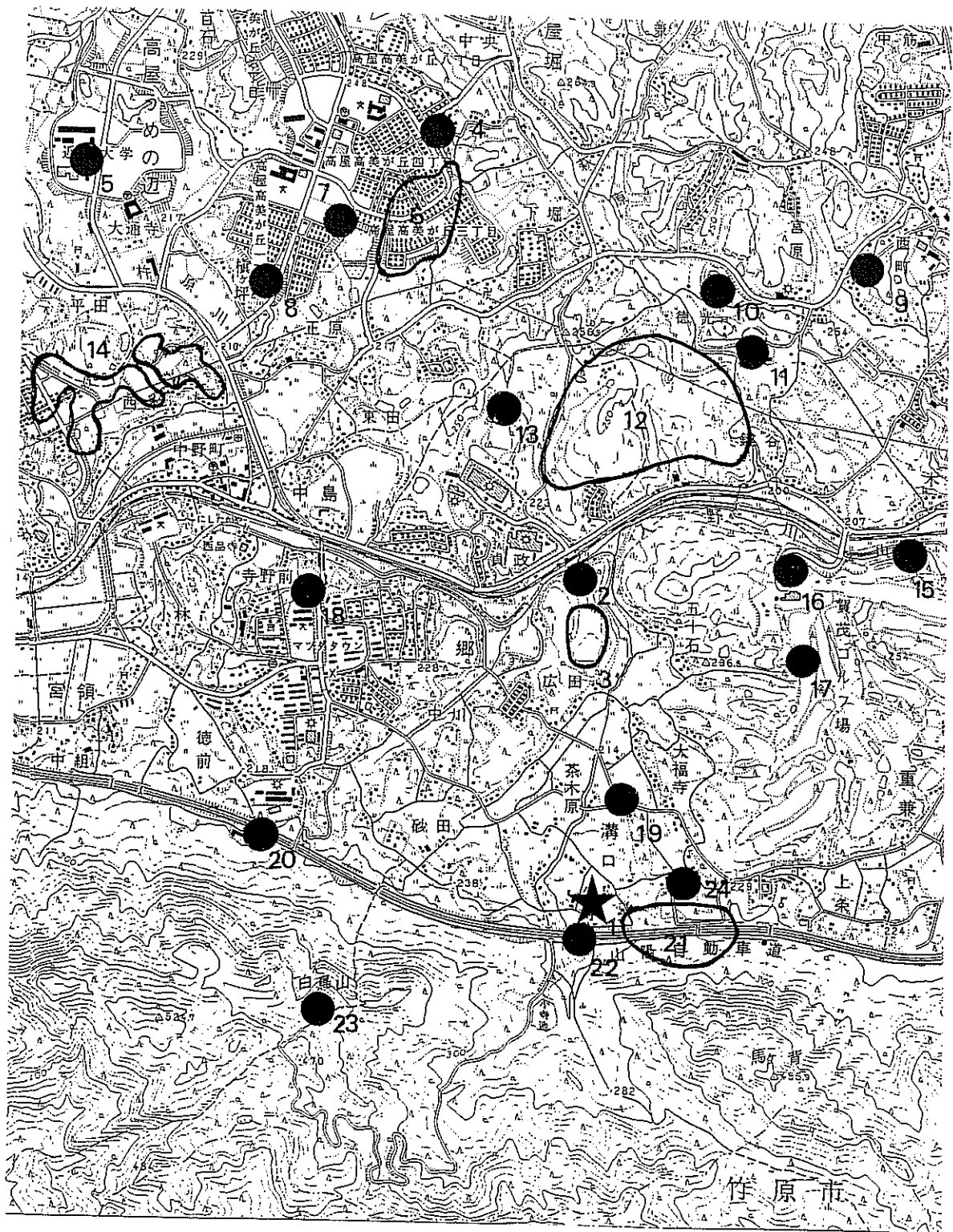


環濠跡(SD1)空中写真(西から)

平成19(2007)年12月2日(日)

財団法人東広島市教育文化振興事業団

東広島市教育委員会



溝口4号遺跡周辺遺跡地図

1:25000

- | | | | |
|-------------|-----------|----------------|-----------|
| 1 溝口4号遺跡 | 2 高屋東2号遺跡 | 3 高屋東3号遺跡 | 4 天神遺跡 |
| 5 新住西7号遺跡 | 6 浄福寺遺跡 | 7 胡麻4号遺跡 | 8 榎ヶ坪3号遺跡 |
| 9 高屋東1号遺跡 | 10 森信1号遺跡 | 11 森信第10号古墳 | 12 福岡山古墳群 |
| 13 仙人塚古墳 | 14 西本遺跡群 | 15 木原向山第1～3号古墳 | 16 鍵向山石棺群 |
| 17 鍵向山第1号古墳 | 18 原の谷遺跡 | 19 溝口2号遺跡 | 20 宮領1号遺跡 |
| 21 原田岡山古墳群 | 22 溝口1号遺跡 | 23 白鳥古墳 | 24 溝口3号遺跡 |

はじめに

みぞくち

溝口4号遺跡は、東広島市高屋町溝口に所在する弥生時代から中世までの複合遺跡です。

東広島呉自動車道の建設工事に伴う埋蔵文化財の調査の一環として、平成19年8月から発掘調査を行ってきました。

しらとりさんかい

ちゅうせきち

この遺跡は、白鳥山塊の北麓に広がる、なだらかな沖積地に立地しています。今年度の発掘調査では、試掘調査によって明らかになった1200㎡余りの調査を実施しています。

周辺では、溝口2号遺跡で、溝で区画された弥生時代中期の集落跡が見つかったほか、高屋東2号遺跡では弥生時代中期の墳墓群と5世紀代の古墳群が調査されています。さらに、2～3kmの範囲内には、原の谷遺跡や西本遺跡群、東広島ニュータウン遺跡群などの大規模な集落跡や墳墓群の遺跡が点在し、市内でも弥生時代遺跡の密集地帯のひとつとなっています。

しらとりこふん

ほうせいざんかくぶちしんじゅうきょう

古墳時代になってもこの地域が重要であったのは、白鳥古墳から鉄刀や仿製三角縁神獣鏡などが見つかっていることから窺えます。

ちんざ

平安時代の終わり頃までには、白鳥古墳の場所に白鳥神社が鎮座します。この神社は、中世を通じて高屋地域の総鎮守として崇敬を集め、山麓に当たる郷や溝口周辺には十楽寺や神宮寺、善仏寺、

だいふくじ

大福寺などの寺院があったとされています。平成元年には、十楽寺跡の可能性のある地点で、別所

こぼぐん

古墓群の発掘調査が行われ、14世紀後半頃の墓地や寺院跡の一部と思われる遺構が見つかっていました。

見つかった遺構

溝口4号遺跡では、大きく分けて弥生時代の遺構と鎌倉時代頃の遺構の二つの時代の遺構が見つかっています。

○ 弥生時代の遺構

環濠跡 SD1

調査区の南端付近で、長さ約40mにわたって断面V字形の溝が見つかっています。この溝は、幅が広いところで3m近くにもなり、北側約三分の一は二股に分かれています。深さは深いところで、1m余りで、所々に水が流れたあとが残っています。

見つかった状況から、調査区外の南北に延びていると考えられますが、全体の規模については不明です。ただし、北側については、試掘調査によって、さらに100m以上延びていることがわかっています。

この溝は、形状や出土遺物などから、弥生時代中期頃の環濠跡と考えられます。環濠は通常、集落などの周囲を取り巻くV字状の大規模な溝を指し、城の堀のように防御のためのものであると考えられています。

遺物が少ないこと、調査区内で二股に分かれる部分が見つかったことなどから、調査範囲は、集落のはずれ（人があまり住んでない部分）の可能性がありそうです。

土坑群

調査区の北東部分で見つかっています。形状から、広くて浅いものと、小型でお椀状のものに分けられます。

広くて浅いものの内、SK3からは石器を作ったときに出る剥片（はくへん）と呼ばれる薄く剥ぎ取られた石片が多く出土しており、鏃（やじり）などの石器を作った工房のような施設だった可能性があります。

掘立柱建物跡群

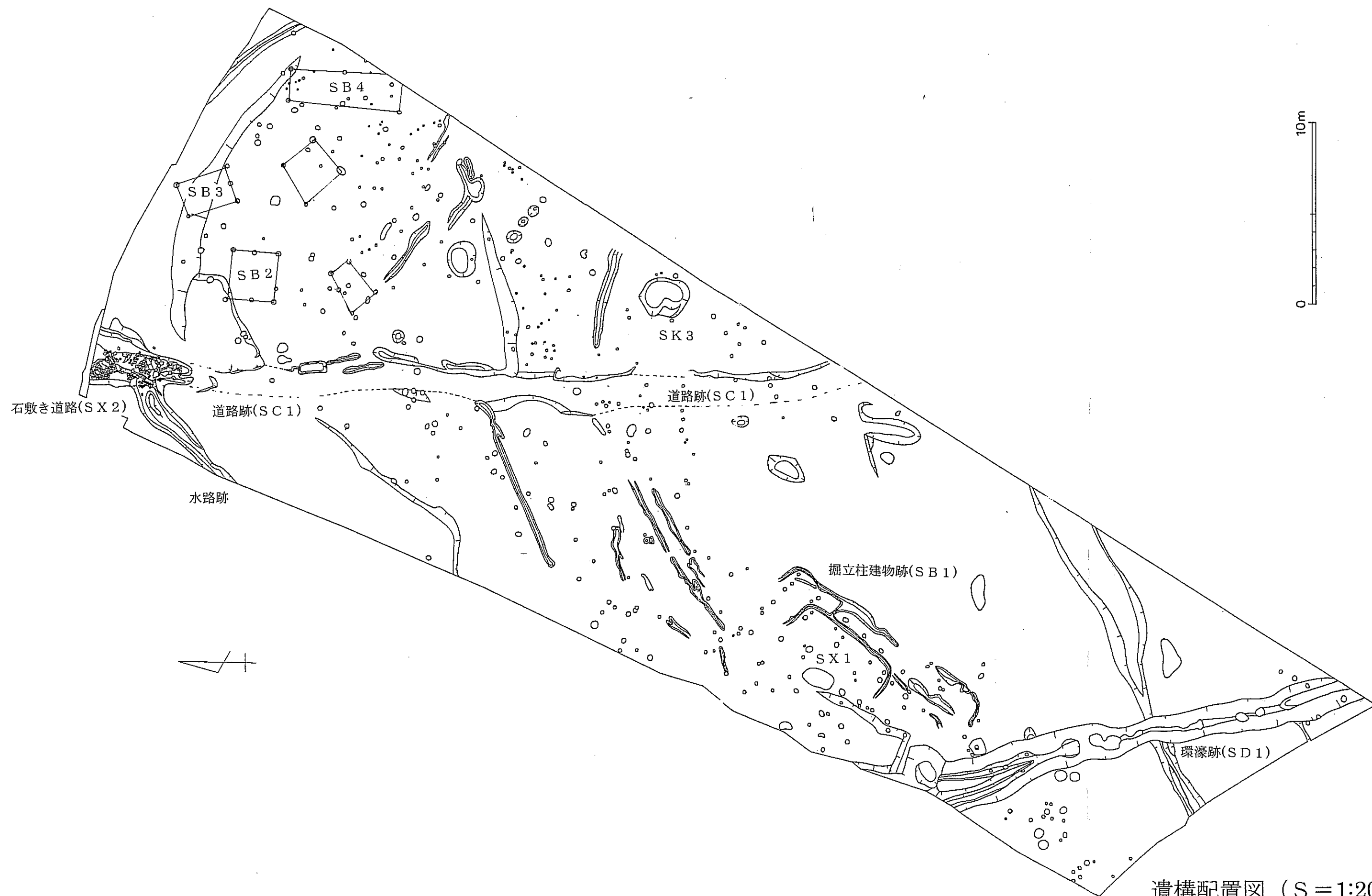
調査区の北東部分で見つかっています。柱穴と考えられるピットと呼ばれる穴は数多く見つかっていますが、建物跡として柱穴が並ぶものは、5棟分ほどです。

SB2は、1間×3間で東西3m、南北4.5mほどの大きさです。

SB3は、1間×1間で、東西約2m、南北約3mの大きさです。柱穴が深くしっかりしています。

SB4は、1間×2間で、東西約2m、南北約6mの大きさです。

柱穴からは弥生土器の破片が出土していますが、元の形のわかるようなものは出土していません。



遺構配置図 (S = 1:200)

○ 中世の遺構

掘立柱建物跡

S B 1 は、出土遺物から 13 世紀後半から 14 世紀半ばくらいまでの鎌倉時代後期から南北朝時代の初期にかけての建物であったと考えられます。

数回の建て替えを行っていると思われる、規模は現段階では明らかにできません。ただ、東西 7 m、南北 10 m ほどの範囲に柱穴が並んでおり、およその規模を知ることができます。

石を平たく敷き並べた S X 1 が、建物跡の真ん中で見つかっています。S X 1 の性格は明らかではありませんが、可能性としては、イロリなどの基礎であったことが考えられます。

道路跡 (S C 1)

調査区を二分するように南北に走る道路跡です。長さ約 45 m 分を検出しました。幅は、1 ~ 1.6 m ほどです。当初は 1 間 (約 1.8 m) の規模で造られたと思われます。

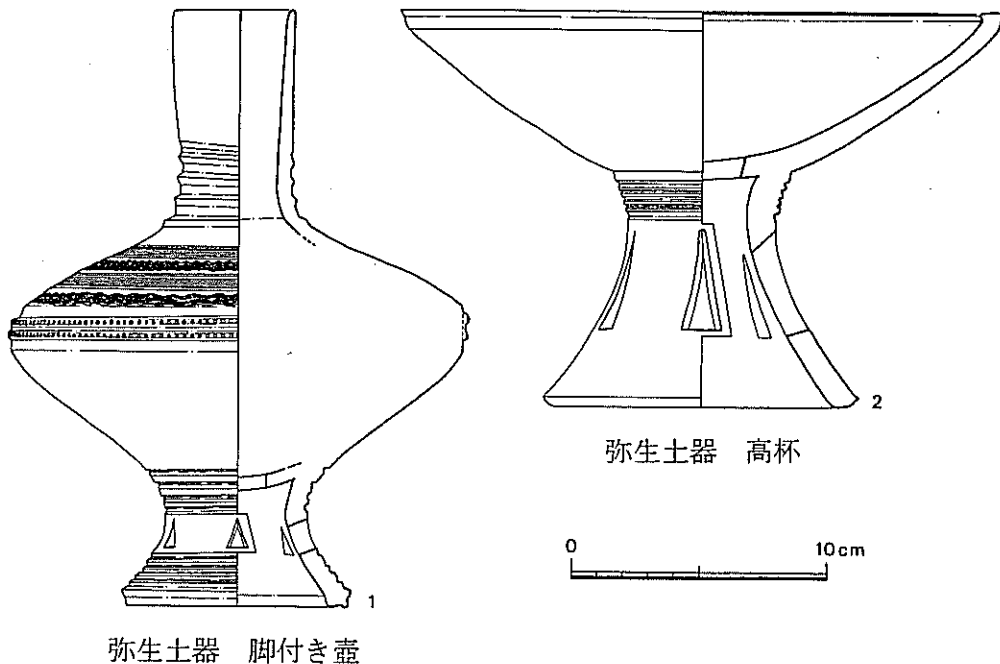
側溝などはありませんが、道の東側に段がつき、道幅の部分が踏みしめられて土質が変化していることから、かなり長期にわたって使用されたことが窺われます。

石敷き道路 (S X 2)

道路跡の北端で見つかった石敷き道路の遺構です。この場所は、西から流れてきた水路状の溝が S C 1 に突き当たって方向を変える部分に当たっており、補強のために石を敷いて舗装したものと思われます。

幅は 1 m ほどですので、当初から舗装してあったのではなく、道路が水路によって削られたものを補修していくうちに造られたものでしょう。

見つかった状況から、さらに北に延びていたものと考えられます。



弥生土器実測図 (参考) (1 : 3)

まとめ

溝口4号遺跡の発掘調査では、弥生時代中期の環濠集落跡の一部と、鎌倉時代の集落の一部が見つかりました。

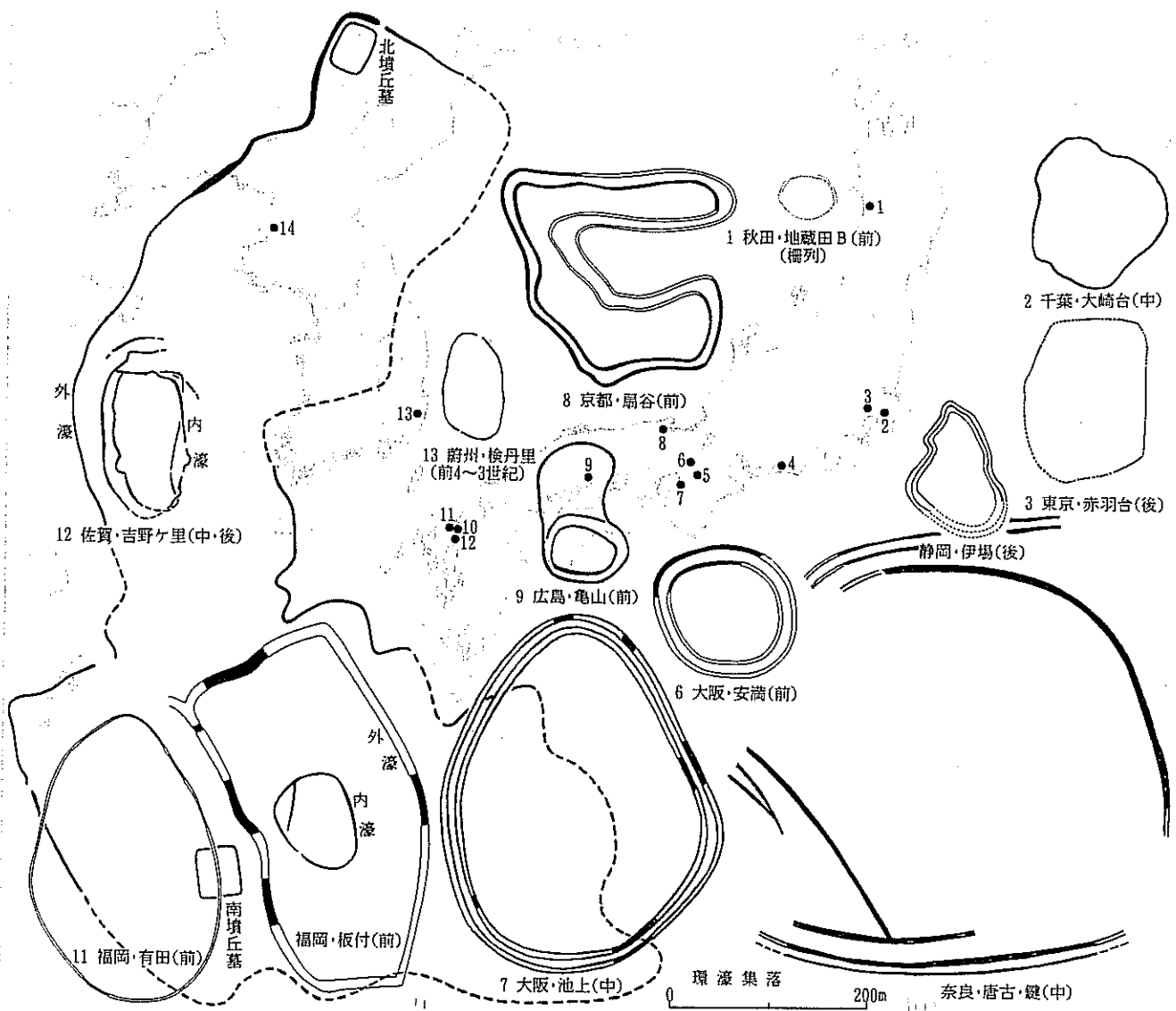
環濠集落跡は、ほぼ南北方向の溝が、緩やかに東にカーブする状況が窺えますが、全体の規模については明らかにできません。ただ、今回の調査によって環濠の内側約20mの幅で環濠に沿って広場のように何も見つからない部分があり、その東側で土坑群や掘立柱建物跡群があることが明らかになりました。他の事例から、環濠の内側には20～30mの広場がめぐっていることが知られていますので、溝口4号遺跡の環濠集落もそのような事例のひとつと考えられます。広場が20mの幅でめぐるとなると、全体の規模はかなりの規模になることが予想されます。小さくても径が200～300mになるものと考えられます。この地域の拠点的な集落と考えるにふさわしい規模といえるでしょう。

鎌倉時代の遺構は、調査区のほぼ中央を南北に走る道路跡に沿って、平坦面や掘立柱建物跡が広がっている状況が窺えました。

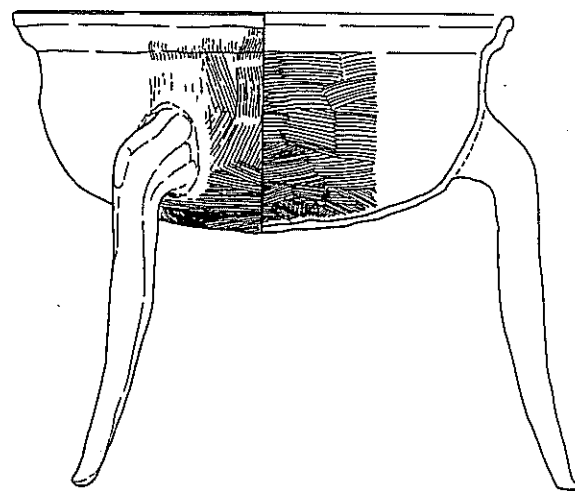
道路跡は幅約1～1.6mで、北端では石敷きで舗装されていることが明らかになりました。広島県内で道路跡が集落遺跡から見つかることはきわめて稀なことです。この道路跡は南に行くと高屋と竹原市田万里(たまり)を結ぶ古い峠道に入ります。ほぼ直線的に峠に向かうことから、この道が高屋と田万里を通る古代から中世の山陽道を結ぶ道であったと考えることができます。高屋地域も古くから東西を結ぶ交通の要衝でしたから、この道は古代から中世にかけての東西の大動脈をつなぐ重要な道であった可能性があります。道路面は硬く踏みしめられており、多くの人がこの道を歩いたであろうことを窺わせてくれます。石敷きで舗装してあることも、道が重要であったからこそ厳重に補修されたものでしょう。

このように見てくると、溝口4号遺跡の場所は、弥生時代には拠点的な環濠集落があり、古墳時代には三角縁神獣鏡を副葬できるほどの豪族が自らの墓を作り、鎌倉時代には多くの宗教施設の中に高屋と山陽道を結ぶ道が造られるなど、一貫して地域の中心的な場所、あるいは交通の要衝として重要な場所であったということが出来ます。

今回の発掘調査は、東広島呉自動車道と山陽自動車道とのジャンクション建設に伴う発掘調査ですが、この場所に交通の重要な施設が造られるというのは弥生時代からのこの地域のあり方を見れば、至極当然といえるのかもしれません。



環濠集落の大きさ比較 (『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会 より)



草戸千軒町遺跡出土脚鍋（あしなべ）実測図（参考資料）